

[文献・資料解題]

Martin Crimp作『Attempts on Her Life』戯曲解題

An Analysis of the Play, *Attempts on Her Life* by Martin Crimp

松村悠実子

Yumiko Matsumura

1. はじめに

イギリス劇作家Martin Crimp (1956-) 作の戯曲『Attempts on Her Life』は1997年にロンドンで初演されて以来、20以上の言語に訳され世界でも注目されている戯曲である。(http://www.royalcourttheatre.com) 最大の特徴は慣例化された戯曲の構成から逸脱した斬新なスタイルにある。日本では、まだあまり知られていない戯曲だが、その非常にまれな戯曲の形態は特筆すべき作品と言える。ここでは作品の紹介を兼ねながら、まずその戯曲の構造に関して述べ、その後Aleks Sierzの著書『In-Your-Face Theatre』(2001)での「In-Your-Face Theatre」の定義と照らし合わせながらその特徴的な戯曲スタイルを分析し、更には上演に際しての演出方法の提示を行う。原文は英語であり、今回はCrimpの作品集『Martin Crimp: Plays 2』(2005)に収録されたものを取り扱う。また本文中の日本語訳は、筆者の試訳であり、原文の中で斜体で書かれている言葉は、日本語では太字で記すこととする。

2. 戯曲『Attempts on Her Life』について

概要

題名: Attempts on Her Life

作者: Martin Crimp (1956イギリス生まれ)

初演: 1997年3月7日

劇場: Royal Court Theatre Upstairs (ロンドン)

演出: Tim Albery

出演: Kacey Ainsworth, Danny Cerqueira, David Fielder, Ashley Jensen, Hakeem Kae-Kazim, Etela Pardo, Sandra Voe, Howard Ward

内容

『Attempts on Her Life』は、いわゆる一般的なウエルメイドの戯曲構成とは一線を画したのものとなっている。大きな特徴として、①17つの「シナリオ」と呼ばれる小作品から構成されている ②登場人物の設定がない ③戯曲の文体(スタイル)の3つが挙げられる。以下、それぞれの特徴に関して

述べる。

特徴① 17のシナリオから構成

17のシナリオのタイトルと試訳

1. All Messages Deleted	すべてのメッセージは消去されました
2. Tragedy of Love and Ideology	愛とイデオロギーの悲劇
3. Faith in Ourselves	私達の信条
4. The Occupier	借家人（所有者）
5. The Camera Loves You	カメラはあなたが大好き
6. Mum and Dad	ママとパパ
7. The New Any	新しいアニー
8. Particle Physics	素粒子物理学
9. The Threat of International Terrorism™	国際テロリズム™の脅威
10. Kinda Funny	なんか面白い
11. Untitled (100 words)	無題（100単語）
12. Strangely!	変なことに！
13. Communicating with Aliens	エイリアンとのコミュニケーション
14. The Girl Next Door	隣の家の女の子
15. The Statement	声明書
16. Pornó	ポルノ
17. Previously Frozen	先ほどまで冷凍中

この『Attempts on Her Life』は、登場人物が現われ、時間軸を中心にドラマが展開されるウエルメイドの戯曲と違い、上記のタイトルがついた17つの独立したシナリオで構成されている。このシナリオ同士の内容は一見関連性がなく、17つの短編集の形を呈している。ただし、一つの共通点としてどのシナリオにも「Anne（アン）」という名前の女性が登場し、彼女にまつわる話が展開される。しかしながら、シナリオによっては、この「Anne」が「Anya」「Annie」「Anny」など、「Anne」の変化形の名称で登場する。また各シナリオによって、彼女は年齢も職業もバラバラで、例えば若い娘・テロリスト・戦争で焼かれた家の母親・ポルノスターなど様々なキャラクターで登場する。また、人だけでなく「車（車のブランド名がANNY）」として語られることもある。ただ、全17編を通してみると、どのシナリオも、一人の女性（物体の場合もあるが）を通して現代社会が抱える問題をビビットに描いている。更に注目すべき点としては、必ずどのシナリオにも「Anne（又はその変化名）」についての話が展開するが、戯曲の中で「Anne（又はその変化名）」自身が登場し、自らを語ることはしない。こういった特徴的な主人公の描き方からこの戯曲のメッセージの一つと思われる「メディア」や「他者」が創り出す「人物像」や「ステレオタイプ」に対する問題提起が読み取れる。

特徴② 登場人物の設定がない

一般的に「戯曲」と言えば、たいてい登場人物が存在する。もちろん「動物」や「妖精」などといった「人間」ではない場合もあるが、総じて「キャラクター」として劇中に存在し、それぞれ役のセリフが書かれている。しかし、この戯曲には、登場人物の指定の表記が一切ない。セリフには役名がな

く、ただ行のはじめに「—」という記号が記されており、それが「話し手が交代する」という指示である。しかしそれ以外の情報：いつ、どこで、誰が、誰と、という設定がない。作者は、この戯曲の上演について、戯曲の冒頭 (p. 202) に以下の注意書きを示している。

「この作品を上演する際、役者のメンバー構成は社会の構成を反映すること。文頭のダッシュ (—) は、話し手の交代を意味する。ポーズ (間) の後にダッシュがない場合は、同じ役者が話しているということ。スラッシュ (/) は、重なってしゃべることを意味する。」

これだけしか指定がないので、この戯曲を上演する場合、演出家によってかなり幅広い解釈の余地がある。例を挙げると、以下のような書き方で示されている。

シナリオ3 『Faith in Ourselves』より抜粋 (p. 217)

- The soldiers are laughing even though these are their own cousins, their own *parents*, their/
mothers and fathers.
- Burning their own *parents* in the sacred orchard. Burning them alive and laughing.
- Or burying them alive. Burying them alive up to their necks in the fertile earth, then smashing
their skulls open with a spade. They have a name for this.

この部分だけで、3回話し手が交代していることは指示されているので、少なくとも2人は必要であることしかわからない。「Anne」自身は出てこない、また登場人物の指定もない、このような「登場人物の不在 (An absence of character)」という形式について、Sierzが著書『The Theatre of Martin Crimp』(2006, p. 52) の中で指摘する様に、Crimpは、劇中でこのようなセリフを書いている。

シナリオ6 『Mum and Dad』より抜粋 (p. 229)

- 彼女は自分のことを、本物のキャラクターじゃない、本やテレビに出てくる様な本物のキャラクターじゃない、何か欠けた、「不在」そう彼女は言うのだけれど、キャラクターの「不在」、そう彼女は言う。
- キャラクターの不在。それがどのような意味であれ……
- She says she's not a real character, not a real character like you get in a book or on TV, but a
lack of character, an *absence* she calls it, doesn't she, of character.
- An absence of character, whatever *that* means ...

こういった表現からも、作者は「登場人物の不在」を意図的に使用しながらも、その意図について話すことに意味を感じていないといった見解を描いているのが興味深い。

特徴③ 戯曲の形式について

17のシナリオの多くは、上記の例の様に、「会話」形式で書かれているが、「会話」形式以外で書かれているシナリオもある。例えば「詩」「モノログ」「英語+外国語でのセリフ」「会話+単語の

羅列」形式などがあり、単純に「キャラクター同士の会話」という一般的な戯曲のスタイルでないのが大きな特徴である。

3. 『In-Your-Face Theatre』のカテゴリーからの分析

Sierzの著書『In-Yer-Face Theatre』（2001）の中で、『Attempts on Her Life』は、その戯曲のスタイルから、「In-Yer-Face Theatre」というジャンルにカテゴライズされている。これは、主に90年代イギリスにおいて現われた新しい戯曲のスタイルである（<http://www.inyerface-theatre.com>）。Sierzによる「In-Yer-Face Theatre」の定義を簡単に述べると（2001、pp. 4-6）、「In-Yer-Face Theatre」とは、慣例の芝居と作りや内容が異なる実験的なものであり、ナチュラリズムという慣例から離脱し、ウエルメイドの3幕物の芝居とは様相を逸している。内容も、モラルや慣習に疑問を投げかけるものが多く、脚本家はボーダーラインに挑戦し既存の考え方や定義に対して問題提起を行っているものである。

これを踏まえると、『Attempts on Her Life』の構成は慣例化された戯曲の手法とは全く異なるという点から、In-Yer-Face Theatreと言え、また内容面も、まさに「何が正しいのか」ということを様々な事例を通し観客に訴えている。例として、以下の様なセリフがある。

シナリオ 11 『Untitled (100 words)』より抜粋 (p. 250)

—しかしながら、私はこれらはすべて完全なるナルシズムだと思います。そして私達は自分たち自身に問うべきでしょう。このようなやりっぱなしの表現がアートだと受け取れるのかを……。

—はい、しかし、まさにそれこそが彼女が言わんとしたポイントだと思うのです：境界線はどこなのか？ 何が正しいのか？

—I'm afraid what we're seeing here is pure narcissism. And I think we have to ask ourselves the question, who would possibly accept this kind of undigested exhibitionism as a work of art? ...

—Yes, but exactly, that's surely the very point she's attempting to make: *Where* are the boundaries? *What* is acceptable? ...

この例の様に作品全体を通して一体何が正しく、何が正しくないのかというボーダーラインを問い、現代社会が抱える諸問題；人種差別、テロリズム、マスメディアなどについて、敢えて過剰、過激な表現をすることで、現代社会の上辺だけの繕いや正論に対する鋭い批判の眼差しを向けていると考えられる。

4. 演出方法

この作品を実際上演するにあたっては、戯曲内での演出の指定が少ない分、演出の方法は多種多様である。そもそも役者の人数も定められていないので、そこから決定する必要がある。イギリスでの初演の際は、男性4人、女性4人の計8人で演じられ、ドイツでのGerhard Willert氏の演出では男性3人、女性2人で演じられたとある（Sierz, 2006, p. 51, p. 213）。筆者も日本人女性10名で実験してみたが、均等にセリフを割ることもでき、この戯曲の懐の広さを感じさせられた。

また日本語に翻訳して上演する際は、性別の問題がある。一人称や語尾は、日本語の場合、男女どちらかを明示する必要が出てくるので、男女どちらの役者がそのセリフを発するかという演出次第で、翻訳が変わってくる可能性がある。

例えば、シナリオ1『All Messages Deleted』の中のセリフ (p. 206) を女性用・男性用とそれぞれにして翻訳してみると以下のような違いが生まれる。

—(略) I'm growing morbid, Anne. I think you should pick up the phone and make me smile, make me smile the way you used to, Anne. I know you're there. I know you're there, Anne. And I know that if I'm patient, you'll answer me.

女性のセリフとしての翻訳：

—(略) 気がおかしくなりそう、アン。いい、あなたは電話をとるべき。そして私を笑わせて、笑わしてよ、昔みたいに。アン。そこにいるのはわかってる。いるのはわかってる、アン。わかってるの、私が根気よく待てば、あなたは答えてくれるってことを。

男性のセリフとしての翻訳：

—(略) 気がおかしくなる、アン。いいかい、君は電話をとるべき。そして笑わせてくれよ、笑おうよ、昔みたいに。アン。そこにいるのはわかってる。いるのはわかってるんだよ、アン。わかってる。僕が根気よく待てさえすれば、君は答えてくれるんだってこと。

5. 終わりに

『Attempts on Her Life』は、その構成、ある種過激ととれる内容から Sierz (2001) が述べる通り、In-Yer-Face Theatre の特徴、差別的・過激ととれる単語から、拒否反応を示す観客もいることも想定されるが、同時にオブラートに包むのではなく過激に表現しながら物事や問題の本質を露呈させているとも考えられる。またそもそも「演劇」とは何か、「演劇自身」まで問うこの作品は、観客にだけでなく、演劇を創る側の人間にとっても大いに考える課題を与えられる戯曲である。演出の方法も幅広く、演じられる国や、役者によって作品の色が大きく変わるこの作品が、今後その上演される時代や、背景によってどう現代社会を映し出していくのか、期待出来る。

参考文献

Crimp, Martin (2005). *Attempts on Her Life*. In *Martin Crimp: Plays 2* (pp. 197–284). London: Faber and Faber Limited.

Sierz, Aleks (2001). *In-Yer-Face Theatre: British Drama Today*. London: Faber and Faber Limited.

Sierz, Aleks (2006). *The Theatre of Martin Crimp*. London: A & C Black Publishers Limited.

“Attempts on Her Life”. Royal Court theatre.

<http://www.royalcourttheatre.com/whats-on/attempts-on-her-life> (参照 2012.12.04).

Sierz, Aleks. “What is in-ye-face theatre?”. IN-YER-FACE-THEATRE.

松村悠実子
Yumiko Matsumura

<http://www.inyerface-theatre.com/what.html> (参照2012.12.04).